

平成22年度兵庫ゼロ災推進大会参加へのお礼

去る7月6日(火)、神戸市産業振興センターハーバーホールにて開催した本年度のゼロ災推進大会には、県下各地から312名のご参加を得、盛大に開催することが出来ました。

ご多忙にも拘わりませず、貴重なご講話、体験発表、特別講演を頂いた方々には改めてお礼申し上げますとともに、ご参加の皆さま方に深く感謝申し上げます。

大会で得られた成果をこれからの安全衛生活動に生かし、無事故・無災害の職場を維持するためにご精励されますようご期待申し上げます。

なお、菊池 昭 講師の講演要録を次のとおり掲載します。(この要録は、三菱電機神戸安全衛生協力会事務局長林谷英一氏のご協力によるものです。お礼申し上げます。)

兵庫ゼロ災推進大会特別講演要録

職場巡視とリスクアセスメント

講師/安全衛生のバトン研究会代表 菊池 昭

「ご安全に！」この言葉は、愛情と感謝の気持ちを込めた挨拶である。しかし、自分だけかもしれないが、心の通っていない口先だけの「ご安全に！」が増えているように思っている仕方がない。遠い昔であるが、従業員2000名規模の自動車部品メーカーに入社。その現場には多くのプレス機があり、指がなくなって一人前と言われた時代であった。指のない作業者を目の当たりにし、その責任者から話を聞かされるたびに「絶対に間違っている。人を傷つけてはならない」との気持ちを強く持ち、安全管理の世界に入った。

一般的には、災害件数の多い少ないで、その事業場の安全管理レベルを見てしまう傾向がある。一生懸命に安全管理を行っているのに、災害が起こってしまう。また、何も活動していないのにゼロ災を達成した職場があるのも事実であるが、長い目で見れば、作業に伴うリスクを評価し、リスクレベルの高いものから計画的に改善することによって、確実に災害を減少させることが出来る。

欧米の安全に対する考え方は「人はミスをする動物

であり、災害をゼロには出来ない」との考え方であるが、日本人は違う。災害は発生すると、その当事者に「たるんでいるから怪我するんだ」と人を責めていた。災害発生には、人、物、管理の面から分析し対応しなければならない。人のみにその原因を押し付けていては、一時的に改善したように見えても、時間の経過とともに対策が忘れられ、同じことを繰り返す結果となる。対策の基本は、本質安全化である。設備機械への対応に取組まなければならない。

災害が起こってからの安全対策では、災害を減らすことが困難であると考え、厚労省は欧米での災害減少手法である「リスクアセスメントを法で努力義務」と定めた。リスクアセスメントは、大きな災害要因から計画的に改善し、そのリスクレベルを下げる活動である。

私が考える安全管理の目的は、「労働災害の防止と健康で安全な作業環境の整備」である。安全職場とは、過去に災害が起きなかった職場ではなく、将来とも災害が起こり得ない職場のことである。アメリカの産業

界では、実際の経験を基に、企業(事業所)における第一線監督者(係長、班長、職長、組長など)として基本的な能力である「教える技能、改善する技能、人を扱う技能、安全作業のやり方」を合理的に習得させるための訓練として監督者訓練(TWI = Training Within Industry for supervisors)がある。その安全作業のやり方(TWI-JS)の中で「安全とは、事前に対策を考えて処置することである。起こってからの事後措置ではない」と定義されている。

では、災害はどうして起こるのか?人がうっかりしているだけでは発生しない。災害に結びつく危険有害要因(ハザード)があり、そのハザードと人が接触するから事故が起こる。そして、接触により発生する傷害や健康障害を災害と言う。事故の先には災害が存在する。即ち、物的面に起因する危険な状態と不安全な行動が合いまったときに災害が起こる。

災害を防止する考え方(=対策)は、①安全とは、災害をなくする活動ではなく、リスク(危険状態)を低減する活動である。②したがって、安全衛生対策とは、ハザード(危険要因)と人間との接触を合理的に防止することである。③人間はミスをする動物である。人間のミスを前提とした安全衛生対策が必要である。④安全衛生対策は、物→人→管理の面からリスクを低減する活動であり、この流れが大切である。⑤安全衛生対策は、信頼性が高いハード対策(設備安全)を優先し、それをソフト(人的、管理的)対策でフォローすべきである。⑥ゼロ災活動は、災害ゼロを目指す活動であり、言い換えればリスクを限りなくゼロに近づける活動である。

職場巡視は、見る巡視から考え・思い巡らす巡思でなければならない。

まさに安全衛生リスクの事前発見と事前対応で臨む姿勢が重要である。そのためには①巡視の目的・対象を明確にする。②職場は情報の宝庫である。安全だけを見るのではなく、トータルリスクマネジメントの視点に立って環境や廃棄物、品質、作業性など広い角度から巡思する。③巡思メンバーのチームプレイで専門性を活用する。④作業の危険・対策を1番知っているのは、その作業員である。作業員の声を大切にすべし。⑤作業観察を通じて、潜むハザードの所在と人と接触

するリスクを予測・確認する。⑥リスクの大きさを見積もる。その大きさによって対策時期や対応が違ってくる。⑦物の姿から、その前後の作業行動・姿勢を考える。現状の姿は行動の結果である。⑧定常作業から付帯作業や異常処置作業などの非定常作業を予測し、作業員の動きを考える。⑨目の前の現象から背景を考える。作業員に、なぜ、この現象が起きたのかを聞き現状確認する。⑩場所・設備・作業名などをデジカメも活用し正確に記録する。これらのことが大切である。

現場への巡視報告には、写真を添付し、改善報告にも写真を活用する。言葉だけでは、見た人の感情が強く出過ぎる場合がある。また、人によって捉え方が違うことも考慮し、客観的事実を示すことで情報の共有化も可能になる。まさに「指摘の見える化」であり、このことで巡視者と現場とが共通した認識となり改善をスムーズに運ぶことが出来る。

2005年4月に起こったJR福知山線尼崎脱線事故は、107名が死亡する大惨事であった。実は、同じような事故が国鉄時代の1962年に常磐線三河島駅でも起こっている。運転手が、ATS(自動列車警報装置)を切って走行した二重衝突事故(160名死亡)である。JR東日本では、この教訓を今でも非常に大切に扱い、自動停止機能をつけた新型ATSの設置と全社員に対し、事故があった場合は、何よりも被災者の救助と後続、対向列車を止める、ことを徹底し教育している。現在、裁判中であるがJR西日本の動きなどを見ると、あの痛ましい三河島事故の教訓がまったく生かされていなかった。同時に私鉄との競争激しく利用者のために一駅増設したものの運行ダイヤは従来と同じであった。新たに一駅追加すると余分に2分かかるといわれている。運転手は、運行時間を守るためには走行スピードを上げなければならない。「安全性よりも定時性を優先した」結果といわれても仕方ない。

職場における災害には、予兆があるといわれている。過去の教訓なども参考にし、発生する可能性がある災害リスクを、発生前に予測、評価し、適切な事前対策に結びつける。そのためにも職場巡思が重要である。職場巡視とリスクアセスメントを通じて、災害リスクをゼロに近づける活動を展開願いたい。